

『現代教育科学』一九六五年夏季号（明治図書出版）

■第五号 “子どもの能力をどう高めるか” を読んで

体を動かすことの教育的意義

矢口 新

「子どもの能力をどう高めるか」という特集を読ませていただいた。正直のところこういう問題はもっと具体的なあるいは実際的な問題として考えられるのだと思っていたわたくしは、ちょっとはぐらかされたような気になった。

子どもの能力をどう高めるといふことは、もっとも普遍的に、いろいろな人々が、いろいろな場所で考え、しかもなやんでいるところである。親は親なりに、教師は教師なりに、そういう意味で、もっとも通俗性をもっているともいえる。そういう人々がすこしでも正しい科学的な考え方で、自分の子どもをみて正しく能力をのばそうと考えることができることは、やがて正しい能力開発の社会的な政策も生まれるものになるであろうと思う。わたくしはそういう立場でものを考えているから、なるだけ具体的実際的なことを聞かしてほしかった。

先日わたくしはある全国的な婦人の集會に出て、教育のゆがみをどうして改めるかという話し合いに参加した。そこでのおかあさん方のなやみは、やはり「この子どもの能力をどう高めるか」という問題につながるものであった。現在とうとうとして社会の風潮になっている受験準備の教育というものが、果たしてほんとうに子どもの能力を高

めていることになっていようかという疑問はおかあさん方のすべてにあつたようである。しかしそれにもかかわらず差し当たつて受験の準備をしなれば、子どもは学校へ入れないという状態になってしまう。それでは今の社会では最低の人間の生活をするチャンスも失われかねない。そういう不安があるから、とうとうたる受験準備の教育に対して、自分ひとりだけが抵抗するということはようなしえないのだという、きわめてにがにがしいジレンマにおちいつている。

受験準備的な教育では子どもの能力がほんとうにのびないのではないかという疑問と心配は直感的なものであつて、おかあさん方にはなくそう感じているといった程度である。そのおかあさん方に必要なことは、正しく子どもの能力をとらえることだと思つた。通信簿にあらわれた五、四、三、二、一という評価はなんにも能力をあらわしてはいない。自分の子どもひとりでもよい。自分の子どもは何がどこまでできるのか、どういうことが考えられないのかということをはつきりつかんでみることにだと思つた。学校の先生の五、四、三、二、一に支配されて、五が少ないからうちの子どもはだめなのだろうと考へたり反対に五が多いからよいのだろうと考へたりしてゐるのでは、あまりによわすぎると思ふ。お人よしというか、おめでたいというか、それでは子どもの能力を高めようなどといつてもとてもだめだという気がした。婦人の集會に出て来た人たちは相当に進んだ物のわかつた人であるけれども、それでも子どものそういう問題になると、社会的風潮のようなものにまつたく支配されているといった感じである。子どもの能力を高めるのは、学校にすつかりおまかせして、自分はその知らせをうけて一喜一憂しているといった感じである。

このおかあさん方が正しく子どもの能力をみてそれをのばしてやろうと考へ、実行してゆくには、まず通信簿の呪縛からぬけ出さなくてはならない。ただばくせんと五が多いとか、少ないとかでなく、具体的に、何がどんな程度にできるか見てほしいと思ふ。しかしそれも考

えてみればなかなかむづかしい。小学校の一、二年生ぐらいなら多少はわかるかも知れないが、上級生になるとそうはいかないかも知れない。何を手がかりにしてそうしたらよいのか。学校で教えられているのは教科であるから、やはりその教科が窓口になりそうである。うちの子どもは音楽が五だというかわりに、笛を吹くのはなかなかうまくいというように見てくれるとよいと思う。そういえばよく家でも練習しているが、ほんとうに好きなのだろうか、といった関心が出てくれるとよいと思う。そういうところから子どもをみる目がひらけて来るのではないか。

通信簿という具体的な形になったもので、お宅の子どもは五がいくつだといわれると、なんでもかんでも五が多ければよいのだという考え方しか出てこない。おかあさん方の頭の中にあるのは、たくさん五をとることが全面発達で、全面発達させておけば試験もパスして、よい学校に入るだろうというわけである。わたくしはそういう全面発達はどうでもよいと思っている。どうせ人間は一つのことしかやれないのだ、何かの職業をもって、それをもって世の中の発展につくすのだと考えているから、何をもって世の中につくすのかを子どものころから親がみてやり、やがて子どももそれを自覚していくようになってほしいと思っている。といって一つだけできれば、あとは何もできなくてもよいということではない。

およそ人間にそういう一つだけできるが、あとは何もできないというようなことはないのであって、本来人間は全面的な発達をとげるものなのである。それはバランスといった方がよいかも知れない。それはあらゆる人が身をもって表現していることなのである。しかし同時に、どんな人もそれぞれ自分の専門をもっている。専門といってむづかしければ職業をもっている。しごとをもっている。得意をもっていいといってもよい。なんでもできるなどということとは絶対はないといつてよい。おそらく原始社会でも、そういう意味の分業はあったのであろう。それは人間の宿命のようなもので、万能になりたいと思つて

もできることではない。

全面発達というのは、具体的にどういふことをいうのだろうか。こゝとばによつて、わけのわからないことを考えているのでは、具体的に子どもを育てるといふような問題に入れないのではないか。わたくしは、子どもの能力を高めることにもつとも関係のあるおかあさん方が人間のあり方の実相をみて、その上で子どもに対してほしいと思つている。それが子どもがこの世に生まれて生甲斐を感じるように育つもとだと思つて。この世に生まれて生甲斐を感じるようにしごとができて世の中のためになつたという感想をもつことのできる人間となるには、何か一つ得意のもので世の人のためにつくすといふことを考えるべきではないのか。ただ散漫に勉強しろといわれて右往左往しているのではそうはなるまい。しごとをするためには、そのしごとだけができればよいということではない。そのしごとなるものが、人間のさまざまな能力を発揮しなくてはできないものである。それはしかし、羅列された教科のどれもこれもやっていたらよいなどということではなく、そういうものを一点に集中させて構造をもたせるような中心が必要なのである。そういう考え方で、子どもの得意をのばしてやることをまわりが考えなければ、子どもの能力を高めることはできないのではないか。子どもの能力を高めるといふことには、そういった卑近な問題が横たわつていふような気がする。

二

日本人の能力といふことには生まれつきといったものがつきまがつていふようである。能力があるとかないとかといふと、生まれつきなのだと思いがちである。能力が低いといふとそれはだめな人間だといひびきをもっている。人間がだめといふ人間の方に力があるのである。能力は育てられたものであると考える方が今の科学では正しいものである。生まれたときには無限の可能性をもつて生まれて来ている

と考える方がよさそうである。そして具体的には何一つ能力をもって来て生まれて来てはいない。成長の過程で身につくのであろう。頭脳と身体、これらはなして考えることはできないが、その二つが生まれて環境の中できたえられていくのである。

能力が高いとか低いとかは、ある時点で、何が育てられているか、育てられていないかをみているのだと考えなくてはなるまい。そういった考え方がどうも一般にはよくわからないらしい。学校の先生方もそうらしい。私は中学校の先生で、能力の低い半分ぐらいの生徒がいなければよい教育ができるのだがということをつけている先生にきわめてしばしばおめにかかる。これはよく考えてみると、まったく逆立ちである。能力が低いのは、今まで、高めるようにしてこなかったからであろう。その罪はむしろおとなの側にある。先生ばかりとはいえない。親も入るが、ともかく環境の側に大いに責任があるのである。それを、子どものせいにして、いなければよいなどという言い方は教育者にあるまじきことだと思う。情ないことだと思うのである。それがしかも数多いように思われる。こまったことである。

しかしこのような考え方に陥ってしまったのは、いろいろな原因がある。ただその考え方を非難してみてもはじまらないようである。今の教育のしかたが、そういう考え方を生み出すものにもなっていると思う。

今行なっている教育は、生徒の能力を育てるために、生徒の頭脳や身体をきたえるという考え方になっていない。先生がもっているものを与えて、おぼえろ、わかったかというやり方である。生徒を自身の立場におき、先生のもっているものを与えるというやり方である。それはほんとうは生徒の能力を問題にしているのではないのである。生徒は水をいれる器であるとか考えられていないのである。そして今先生が与えるものが受けとられないと、それは生徒の能力がひどいと考える。その時の時点まではそうであろうが、それは生徒が、それまでにそれを受けとる力を育てられてきていないからである。その力を

育てることを考えないで、今の時点だけで能力が低いといい、しかも、それを人間の低さにしてしまうのである。生まれつきのものだと考えてしまう。まったく非科学的というか、そういうなものである。生徒の方ではやりきれない。しかしそういう考え方も、教育のやり方と深い関係がある。教育のやり方が、そのように、生徒の能力を育てるということをねらって成り立っていないのである。今の時点で、いれものとしてしか生徒をみていない。そういう見方に立ってのやり方である。与える方法である。それで能力といえば受けとる器の大小のようなものになる。器は大きくなるといって考え方はない。能力は育つという考え方はないからである。それは人間は生まれつき能力が高かったり、低かったりするという考え方につながる。

能力別学級などということばを使うとき、そんな考え方がよく出る。生まれつき能力の低いものは、低い程度のことだがまんするしかしかたがないなどという。その低いことからしだいにつみあげて、高くするなどという考え方はないのである。高いものでも昔は低かったという事実がいつの間にか忘れられている。そうなると、能力のあるもの、低いものという差別感が出てくる。それがそのまま社会につながる。せめて、教育にたずさわる人が、ほんとうに能力というものの考え方をしっかりもって、社会に対して働きかけてくれればずいぶんちがうのだろうが。

能力を開発するというようなことばが使われ出したが、それも、右に述べたような誤った考え方の上に立っていわれているならば、意味がない。それどころか害をなす。英才教育などというのにもそんな匂いがする。たまたまある時点で能力がなかったと判定されたら、切りすてられてしまうことになる。まことに不人情なことになる。不人情くらいではすまされない人間のさまざまな能力、可能性を社会みずからがほうむっていくことになってしまう。そういう自然の条理に合わない社会になると、その社会はしだいに崩壊する。

人的能力開発の政策を立てている人々も、こういう人間能力観については残念ながら、きわめて低俗のようである。人間についての哲学が貧困なのである。行政当局がその日ぐらしの中で立てる政策の中では、じっくりそういうことを検討して、正しいもののあり方をきわめるといことができないのである。つまり常識の線で何事もはこぼれていくのである。その常識が低俗だということはそれだけ日本文化の程度が低いということかも知れない。もっとスペシャリストのことを聞いてくれるようになるとういと思うが、スペシャリストも、そういう点では、具体的な面で、高尚な哲学を生かす努力をする必要があるというものである。そういうことで、一歩でも二歩でも進めなければ、今生きている子どもの能力をすこしでも高めることにならないのである。

観念論的哲学も結構だが、やはり、子どもの能力をどう高めるかという問題は、今生きている問題として、現実的にすこしでもよくなるように努力したいと思う。最善でなくとも、次善、三善でも少しでもよくなっていくというつみあげをしたい。これが今生きている子どもに対する責任であると思うからである。

三

働くということが、今の教育に乏しいのは前にも言った今の教育の考え方から全体的に考えていることである。わたくしはこれをわからせるとい教育の性格だと思っている。わかるというのはどうも身体を使わない頭の中のことと考えられがちである。ほんとうにわかるというのはけつしてそうではないのだが、やはりもうそういうことばの習慣ができてしまっている。そうになると、わかるなどということは何が何だかわからないものになる。先生がわかったかとい、はいわかりましたと答えても、それは、わかったかと思っただけである。人間は本来、自分のもっているものだけでしか受けとれないのである。だからわかったといっても先生のわかり方と子どものわかり方とは必ずしも同

じではない。いな、どれがどうかおさえようがないのである。

そうになると、ことばだけの問題になって、ことばをそらんじていればそれがわかったことと表明になる。しかしわけのわからないことでも、ことばにすることはできるのである。こうして、ますますわけのわからないことになっていくのである。空虚なものを求めて右往左往することになり人間は何をしているのか、実際の能力のことはどこかへ消えてなくなってしまう。

わかるでなくして、できることがたいせつなのである。わかるというのは、ある考え方を自分もたどれる、考えることができるということではなくてはならない。考えることができるというのは、みずから働くということである。働くというのは頭の中だけのことでなく、身体を使うことも意味する。働くというのはを身体だけのことと考えるのもまた日本人の陥っている誤った考え方である。頭もまた身体の一部である。具体的に考えるというのは、頭の中だけのことではないのである。

働くことを通じて能力は養われるのである。働くことができるようにするのである。考えることができるというのは、そういうように働くことなのである。頭と身体を働かすことなのである。

学校でも家庭でも、子どもをほんとうに働かすこと、そこで能力を育てることを考えてほしいと思う。そういうことも、これからの努力では多少ずつ事態を改善していく道をつけられそうだと思う。そういう一歩一歩が、今生きている子どもの能力をのばし、それがまた次のステップを生み出すと思う。われわれの思想も、そういうふう実践的、現実的でありたいと思う。長い歴史をもつ人間のことだから、ただ考えることだけでは、よくならないのである。

＞前国立教育研究所＜

*ライブラリー編集部注

本論文の表題は「体を動かすことの教育的意義」となっているが、文脈からみて、本来は「体を働かすこと」であったと考えられる。